

令和元年6月3日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11621

研究課題名(和文) 若年・中年・高齢乳がんサバイバーの生活構築の構造化とその比較

研究課題名(英文) Structuring of Life-building by Young, Middle-aged and Elderly Breast Cancer Survivors, and its Comparison

研究代表者

中條 雅美 (CHUJO, masami)

鳥取大学・医学部・教授

研究者番号：20382426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：若年・中年・高齢乳がんサバイバー22名に対してインタビューを行い、質的分析を行ったところ、若年・中年・高齢群ともに《姿勢》《手段》《妥協》を持つことによって、《がんを経験して得た生活スタイル》を獲得していたことが明らかとなった。ただし、《がんを経験して得た生活スタイル》を構築する要因の一つである《妥協》に含まれるサブカテゴリーは、若年群1、中年群2、高齢群3と数が異なった。そのため、《がんを経験して得た生活スタイル》を支える大きさは、若年群、中年群、高齢群の順で大きくなっていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若年乳がんサバイバーは性成熟期、中年乳がんサバイバーは更年期、高齢乳がんサバイバーは更年期後とライフステージが異なると抱えている課題も違う。そのため、ライフステージにあった看護介入をすることが必要である。本研究はそこに視点を置いてすべてラウフステージの成人乳がんサバイバーに適した看護介入を行い、QOLを向上することに寄与することができる。

研究成果の概要(英文)：A qualitative analysis was conducted of the data obtained from interviews of young, middle-aged and elderly breast cancer survivors (n = 22), which revealed that all the group members had established their “structured lifestyle based on their cancer experiences,” based on their “attitudes,” “measures” and “compromise.” However, the number of subcategories included in “compromise,” which was one of factors for building a “structured lifestyle based on cancer experiences,” was different among the young, middle-aged and elderly groups (1, 2 and 3, respectively). The degree of “compromise” underpinning the “structured lifestyle based on cancer experiences” increased in order of the young, middle-aged and elderly groups.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がんサバイバー ライフステージ 生活構築

1. 研究開始当初の背景

近年、がん患者、特に女性特有のがん患者の発症年齢の若年化が進んできていることが注目されている。わが国においても20～30歳代の若年乳がん患者が増加しており、40歳前後の年代における女性のがん患者数の第一位は双方とも乳がん患者で(国立がんセンターHP:がん情報サービス, 2011)。さらに35歳以下の乳がん患者の予後は比較的悪いことも報告されている(Ohno; 2012)。若年乳がん患者は性成熟期でありながら比較的予後不良なため、結婚・出産を考慮した社会的予後をどう支えるかが重要な課題であり(Ohno; 2012)、その生活やQOLの心理・社会側面に焦点を当てた研究が急務である。

申請者は、乳がん患者の生活やQOLの心理・社会側面に関する研究を続けてきており、初発乳がん患者の生活構築の難しさについて検討してきた(中條他, 2003)。そして、初発乳がん患者や再発乳がん患者に関する生活構築やQuality of life (QOL)向上に関する看護援助法を報告してきた(Chujo et al. 2005; 中條, 2006; 中條 2007)。しかし、これらの対象者の適格条件は20歳以上の成人女性であったが、ほとんどが40歳以上の更年期や老化が始まる年代である中年・高齢乳がん患者が対象となっており、それらの年代の対象者らの生活やQOLを検討する研究となっていた。女性のライフサイクルにおける各時期によって生活課題が異なるにもかかわらず、他の先行研究も同様にライフサイクルを考慮せずに乳がん患者のQOL等を検討する研究がほとんどであった。

国内外で、若年乳がん患者のQOLに関する報告が増えてきた(Peate et. al. 2009; Dunn et. al. 2000; Gabriel 2010, Antioie et. Al. 2013; Goncahres et. al 2014; 廣川 詠子他, 2014; 軽部 真粧美他, 2012; 近藤 恵子他, 2013; 大松 尚子他, 2012)

欧米において、乳がん患者の年代間比較を行った報告では、若年乳がん患者の方がそれ以上の年齢の乳がん患者よりも、統計的にQOLが低いことが報告されている(Komblith et. al. 2013; Champion, 2014)。

しかし、ライフサイクルによる女性の心身の変化を考慮し、生活課題の異なる性成熟期である若年乳がん患者、更年期である中年乳がん患者、老化の始まる高齢乳がん患者を比較し、各世代における生活実態を比較することから、若年乳がん患者の生活の特徴を明確化させた研究はみられない。

以上のことより、本研究は若年及び中年、高齢乳がん患者の生活構築の現状を構造化することを目的とした。

本研究により、若年及び中年、高齢乳がん患者の生活構築の現状を構造化し比較されれば、年齢が関連する課題に対して有用な看護援助が見出され、各年代に応じて乳がん患者に適した看護を提供する礎となることが期待できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、若年(20～40歳未満)・中年(更年期: 40～55歳未満)・高齢(更年期後: 55歳以上)乳がんサバイバーの生活構築の様相を構造化し比較することである。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

初発乳がんサバイバーで、以下の選択基準をすべて満たし、除外基準のいずれにも該当しない患者を登録する。

選択基準

以下の基準をすべて満たす患者を対象とする。

- 1) 初発乳がんサバイバー
- 2) 若年乳がんサバイバーは20～40歳未満、中年（更年期）乳がんサバイバーは40～55歳未満、高齢（更年期後）乳がんサバイバー55歳以上に診断を受けた者
- 3) 病気についての情報開示が行われている者（治療歴は不問）
- 4) 乳腺外来フォロー中である者
- 5) ホルモン療法以外の治療が終了している者

除外基準

以下のいずれかに抵触する乳がんサバイバーは本臨床研究に組み入れないこととする。

- 1) 再発している者
- 2) 全身状態が重篤な者
- 3) 活動性の重複がんがある者
- 4) うつ病、適応障害などのために日常生活に支障をきたす者
- 5) 研究の趣旨を理解するのが困難な者
- 6) その他、研究責任者が研究対象として不相当と判断した者

（2）倫理的配慮

鳥取大学医学部の倫理審査の承認を受けた後、研究の内容、研究に参加しなくても診療上の不利益を受けないこと、同意後にも研究参加を拒否できること等を説明し、文書を用いて同意を得た。

（3）研究内容

米子市内の2つの総合病院において、適格条件に当てはまる対象者に対して、下記インタビューガイドに沿って半構成面接法を行った。面接内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。

インタビューガイド

しこりをどのように見つけましたか。

診断と治療は、どのように行われましたか。その時のお気持ちと生活はどうでしたか。治療の前と後で、生活がどのように変わりましたか。何か工夫しておられることはありますか。

今は、治療をされていますか。

今は、どのような生活をされていますか。これまでの生活と変わったことはありますか

今のお年で、病気になったことにたいして、どのように感じておられますか。

女性性に関して、何か感じておられることを教えてください。病気の前後で変化しましたか。

ご家族はどうですか？ご家族の様子が病気の前後で変わりましたか。

お仕事は、なさっていますか。お仕事は病気の前後で変わりましたか。

どのような将来の目標がありますか。それは、病気の前後で変わりましたか。

何か社会的なサポートを受けておられますか。それは病気の前後で変わりましたか。

（4）分析方法

面接内容を逐語録に起こし、その逐語録をデータとして、研究目的を基に若年乳がん患者の生活構築に関わる場面を取り出す。その際は、概念の前提からできるだけ離れて、言語の底に隠れている意味を識別して、対象者らによって経験された現象に焦点を当てる。また、一連の面接の文脈をつかむために、逐語録を何度も繰り返し読み、類似しているパターンに区分けし、相互の関係を比較検討して、それぞれのパターンを意味するラベルに区分けする。得られた名称がそれぞれのパターンの意味を表しているのか、逐語録を何度も繰り返し見直しながらさらに類似しているパターンに分け、相互の関係を比較検討することを繰り返した。

4. 研究成果

(1) 研究対象者の概要

研究対象者は、若年乳がんサバイバー8名、中年乳がんサバイバー7名、高齢乳がんサバイバー7名の計22名であった。研究対象者はすべて30代以降の年代であり、病期は1～である。った。

(2) 若年・中年・高齢乳がんサバイバーの生活構築

質的分析方法にて、若年・中年(更年期)・高齢(更年期後)乳がんサバイバーの生活構築の在り方について分析した結果、生活構築は《姿勢》《手段》《妥協》によって《がんを経験して得た生活スタイル》を得るという構造をとらえた。また、ライフステージによって《妥協》をするカテゴリー数は若年群、中年群、高齢群の順で多かった。

文中の《》はコアカテゴリー、【】はカテゴリー、〔〕はサブカテゴリー、「」は対象者の言葉を示す。

《姿勢》

これは、乳がんサバイバーががんになった後の生活を構築するための基盤となる姿勢を示すことであった。これには、【医療者を信頼している】、【がんについて考えすぎない】、【希望を持ち続ける】があった。

【医療者を信頼している】

これには、〔医師へのお任せ〕〔医療者の対応の良さ〕〔医療の良さ〕があり、それは若年・中年・高齢に共通した内容であった。

【がんについて考えすぎない】

これには〔がんは特別ではない〕〔がんについて考えない〕〔悩む期間がなかった〕が若年・中年・高齢群に共通した内容であり、〔悩む期間がなかった〕は高齢群以外で抽出された内容であった。

【希望を持ち続ける】

これには若年・中年・高齢群に共通した内容として〔治療の効果を期待する〕が、若年・中年群においては〔生きがいを見つける〕が、若年・高齢群においては〔他患とのふれあい〕が、若年群には〔拳児・結婚願望の再燃〕があった。

《手段》

これには【情報収集する】【自分が一番頑張る】【子育ての必要度が糧となる】【経済的負担感がない】があった。

【情報収集する】

これには若年・中年群においては〔医療者と書籍インターネットから情報を得る〕が、高齢群においては〔主治医以外の情報を避ける〕があった。

【自分が一番頑張る】

これには若年・中年・高齢群に共通した内容として〔自分で頑張る〕〔周りとの関係性に合った情報開示をする〕が、高齢群以外において〔弱みを見せない〕があった。

【子育ての必要度が糧になる】

これには若年群においては〔子供がいるから頑張れる〕が、中年群においては〔子供の状態に合わせる〕が、高齢群においては〔子と親としての役目が終わっている〕があった。

【経済的負担感がない】

これには若年群においては〔経済的支援がある〕が、中年群においては〔経済的負担感が少ない〕が、高齢群においては〔経済的負担感がない〕があった。

《妥協》

これには【乳房の変形を受容する】【発病年齢が納得できる】【がんよりつらいことがある】が含まれた。

【乳房の変形を受容する】

これには、若年・中年・高齢群で〔乳房の形状変化が気にならない〕が、若年・中年群では〔見た目の変化を少なくする〕が、高齢群では〔乳房の記録を残した〕があった。

【発病年齢が納得できる】

これには、中年・高齢群に〔高齢だったら仕事の支えがなくなつらくなっていた〕〔若かった

ら大変だった、〔好発年齢なので許容できる〕があり、若年群には当てはまるサブカテゴリーはなかった。

【がんよりつらい症状がある】

これは、高齢群のみで〔がんより他の病気がつらかった〕〔高齢だからしんどくても仕方ない〕があった。

《がんを経験して得た生活スタイル》

これには【状態に応じた生活ができる】【今の生活を大切にする】【病前より健康になった】があった。

【状態に応じた生活ができる】

これには、若年・中年・高齢群ともに〔心身ともにあまり辛い〕〔早期発見・治療をした〕〔体調に合わせた生活・仕事量〕〔家庭・職場のサポート〕があった。

【今の生活を大切にする】

若年・中年・高齢群ともに〔今を大切にする〕〔感謝〕があった。

【病前より健康になった】

若年・中年・高齢群ともに〔食生活に気を付ける〕〔健康的な生活をするようになった〕があった。

(3) 若年・中年・高齢乳がんサバイバーの生活構築の構造

若年・中年・高齢群ともに《姿勢》《手段》《妥協》を持つことによって、《がんを経験して得た生活スタイル》を獲得していたことが明らかとなった。(図1)ただし、《がんを経験して得た生活スタイル》を構築する要因の一つである《妥協》に含まれるサブカテゴリーは、若年群1、中年群2、高齢群3と数が異なった。そのため、《がんを経験して得た生活スタイル》を支える大きさは、若年群、中年群、高齢群の順で大きくなっていった。

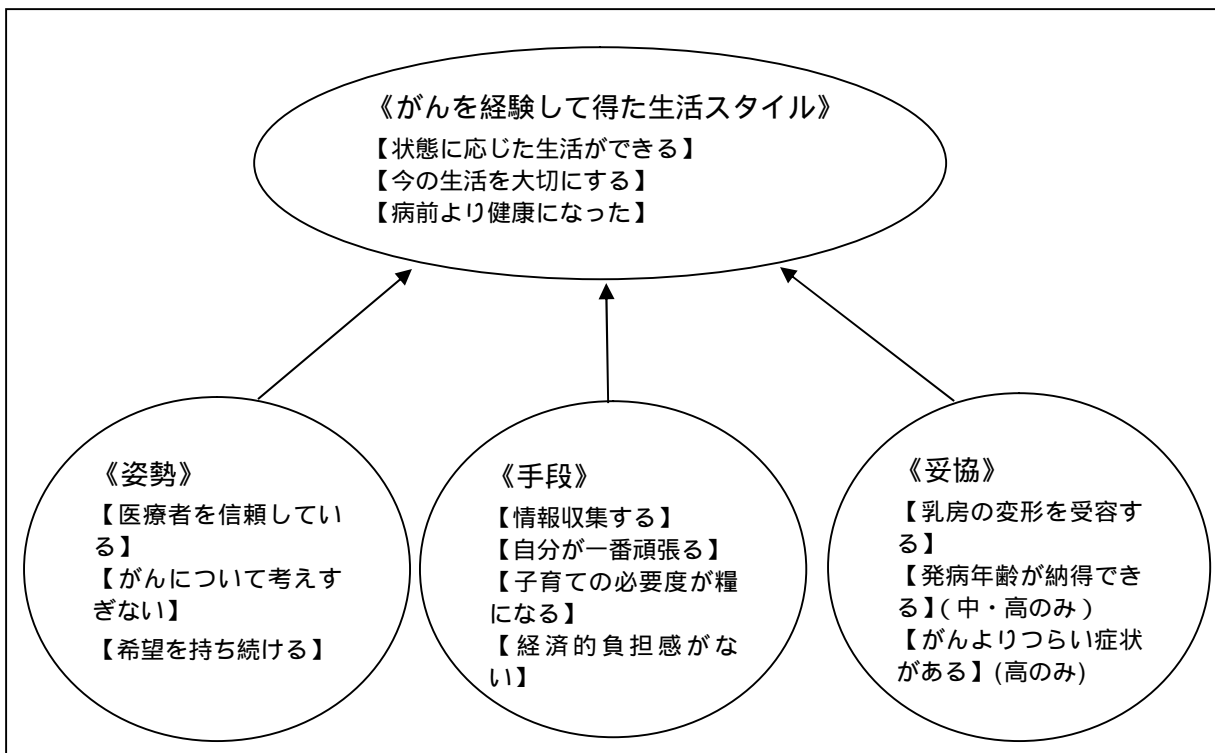


図1 若年・中年・高齢乳がんサバイバーの生活構築

(4) 看護への示唆

若年・中年・高齢乳がんサバイバーが新たな生活スタイルを獲得するには、《姿勢》《手段》《妥協》を強化する看護介入をする必要性が示唆された。また、若いほど乳がんになったことを《妥協》する選択肢が少ないため、《姿勢》《手段》を強化するケアが必要となることも示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

田中 茜, 岸田 絢子, 塚田 結佳, 中條 雅美: 若年性乳がん患者が抱く不安について、(査読なし)看護展望 43(6)、59-65、2018。

〔学会発表〕(計 2件)

(1) Masami Chujo, Reconstruction of the Daily Lives of Survivors of Juvenile Breast Cancer、

EAFONS , 2019 .

(2) Chujo M, Kishida A, Tsukada Y, Tanaka A: Anxiety of young women with breast cancer , ICCN , 2015.

〔 その他 〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：岡村仁

ローマ字氏名：Okamura hitoshi

所属研究機関名：広島大学

部局名：保健学研究科

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 40311419

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。